

活動報告書

報告者氏名：三橋寛子、太田直登

所属：青森県立浪岡養護学校

記録日：2013月2月25日

活動内容のタイトル：「かなトーク」でコミュニケーション

活動内容の概要

発音が不明瞭であり聞き取りにくい生徒とのコミュニケーションツールとして、iPadのアプリ「かなトーク Plus」を活用した。不随意運動があり、押したい文字と違う文字をタップすることが多いため、キーボードカバーを自作し、誤入力を少なくした。

【対象生の情報】

- ・学年 高等部2年男子
- ・障害名 Leigh 症候群、知的障害
- ・障害と困難の内容

発声は一音ずつゆっくり話すが、発音が不明瞭であり聞き取りにくい。

昨年度、骨折の治療のため右側を下にすることが多かったため、利き手の右手は可動範囲が狭くなっている。指も開きにくく力が入りにくいが、不随意運動が少なく細かな動きが可能である。左手は握る力が強く可動範囲も広いが、不随意運動があり細かな動きは苦手である。

平仮名、片仮名、小学校低学年程度の漢字を読むことができる。

【活動目的】

- ・当初のねらい

発声は一音ずつゆっくり話すが、不明瞭であり聞き取りにくい。そのため、意思表示を明確にするための手段の獲得が必要である。iPadで「かなトーク Plus」などのVOCAアプリを活用することでコミュニケーションの力を高め、コミュニケーションツールとして定着させたい。

- ・実施期間 平成24年6月～9月、25年1月～2月
- ・実施者 三橋寛子、太田直登
- ・実施者と対象生の関係
三橋寛子（学級担任）
太田直登（自立活動を週2時間担当）

【活動内容と対象生の変化】

- ・対象生の事前の状況

本生徒からの発信はほとんどがことば（音声）である。シンボルや絵カード、50音表を使うことよりもことば（音声）で伝えたいという気持ちが強い。発声は一音ずつゆっくり話すが、不明瞭であり聞き取りにくい。また、シンボルや絵カードの活用も試みてきたが、活用する機会が少なく、細かい内容も伝わりにくいため、50音表などを活用して確実に伝えるためのコミュニケーションツールが必要である。

平仮名、片仮名、小学校低学年程度の漢字を読むことができ、以前に電子辞書でコミュニケーションを図ったこともある。

- ・活動の具体的内容

主に2校時に設定されている自立活動の中で、「かなトーク Plus」を使用し、名前や漢字の読みを入力して、アプリを使うための操作を学習した。

平仮名の清音から濁音、半濁音にする操作や1文字削除、全削除の操作は理解できた。スタイラスペンの持ち方が安定しないため、人さし指を固定するための輪を付けたことで、ペン先でiPad画面を確実にタップできるようになった。しかし、左手は不随意運動があるため、指導者が肘を支える必要があった。目的的文

字ではなく隣の文字をタップすることも多く、キーボードカバーの工夫が必要であったため、キーボードカバーの準備ができるまで「かなトーク Plus」の使用をいったん中止した。

「かなトーク Plus」の文字配列に合わせてキーボードカバーを作製し、入力の実習を行った。目的の文字にたどり着くまで時間はかかるものの、以前よりも確実に文字をタップできるようになった。

・対象生の事後の変化

6月は右手の可動範囲がせまく、自分から動かそうとすることは少なかったが、徐々に可動範囲が広くなり、右手でも「かなトーク Plus」の入力をするようになった。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

「かなトーク Plus」の活用と平行して、小型電子辞書やシンボルの活用にも取り組んできた。コミュニケーションの環境を整えてきたことと合わせ、6月に比べて体調面や精神面で安定したことで、自分から話すことが多くなり声量も大きくなった。まわりの人に対する発信の意欲は高まっていると感じているが、本人にとってのコミュニケーションツールは、まだ音声が第一であり、自立活動の時間以外での活用はほとんどなされていない。しかし、音声以外の手段を獲得することは必要であると思われるので、今後も継続していきたい。

・エビデンス

iPad をフレキシブルアームに固定し、角度や距離を調節することで、右手・左手とも指導者が肘を支えなくてもひとりで画面をタップできるようになってきている。また、「かなトーク Plus」での入力や訂正・削除の操作は、キーボードカバーをつけることで、より確実にようになってきている。

・その他エピソード

簡単な操作で、いつでも、どこでも使うことができるコミュニケーションツールの獲得が急務と考え、iPad での「かなトーク Plus」の活用と平行して、小型電子辞書の活用にも取り組んできた。また、緊急の SOS を発信するためのシンボルを車いすの肘掛け部分に取り付け、発信の手段を広げてきた。

小型電子辞書は、ボタンの凹みを深くすることで誤入力を少なくするようにした。文字配列の違いによる混乱はあまり見られず、濁音や半濁音への変換や訂正の操作も理解している。調理実習で味見をしたい希望を電子辞書に打ち込んできたこともあった。

「かなトーク Plus」と同じ画面サイズで50音表を作製し、文字のまわりに2mm程度の枠を設定することで、目的の文字を確実に指さすことができるように工夫した。iPad がない場所（病棟や家庭）で活用ができればと考えている。

また、毎日の健康観察では、その日の状態をシンボルを選んで伝えたり、体調が悪いとき体のどの部位が痛いのかをシンボルを選んで伝えたりすることが多くなった。

今後の検討課題として、電子辞書は表示される文字が小さく、表示できる文字数も少ない。一方、iPad での「かなトーク Plus」は文字が大きく表示できる文字数も多いが、移動範囲がやや広い。両手の可動範囲を考えると、iPad ミニを試してみることも必要と思われる。

今後も、本人にあったコミュニケーションツールを探っていきたい。



キーボードカバーを付けて文字入力



キーボードカバーとスタイラスペン